

JPPaCは患者中心の医療を学んで10年  
これからも「すべてのサービスは患者さんと共に」

10周年記念シンポジウム

# ヘルスケアとコミュニティの可能性

2023年4月22日（土） 14:00～16:00オンライン

新型コロナウイルスの感染拡大以降、人と人との「つながり」のあり方は様々な面で変化しました。加えて、先行きの不安／生活不安／健康不安など、人々は様々な不安を心の内に抱え、解消されることもなく日々を過ごしています。こうした不安の解消の糸口となるのは、一つには、人と人が支え合うコミュニティではないでしょうか。JPPaCの10周年記念シンポジウムでは、「ヘルスケアとコミュニティの可能性」と題しまして、それぞれ、様々な形態のコミュニティで活躍されてきた3名の登壇者をお招きして、コミュニティが果たす可能性について考えていきます。



演者：

伊藤 智樹さん 富山大学学術研究部人文科学系（人文学部）教授  
孫 大輔さん 鳥取大学医学部地域医療学講座 講師  
桃井 里美さん 強皮症患者会「明日の会」世話人

司会： 松繁 卓哉さん 国立保健医療科学院医療・福祉サービス研究部 JPPaC理事

参加費無料

参加申込方法：[JPPaC@info.or.jp](mailto:JPPaC@info.or.jp) まで、お名前 所属 お立場を記入ください。

主催：NPO法人患者中心の医療を共に考え共に実践する協議会（JPPaC）

 NPO法人  
患者中心の医療を共に考え  
共に実践する協議会

# 登壇者のプロフィールとお話の要旨

## 孫大輔さん：

鳥取大学医学部地域医療学講座 講師、日本プライマリ・ケア連合学会認定 家庭医療専門医、一般社団法人コミュニティウェルビーイング研究所代表理事。2010年より市民・患者と医療者の対話の場「みんくるカフェ」を主宰。2016年より東京・谷根千地区において「谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）」を実践し、2019年に短編映画「下街ろまん」を制作。2022年には在宅看取りをテーマとした映画「うちげでいきたい」を制作。

【要旨】「コミュニティのウェルビーイングをつくりあう：映画づくりと地域での対話活動から」

地域のウェルビーイングにとって、多様な人がつながり支え合うための場づくりは重要である。安心して集える居場所、ゆるくつながりあえる場が地域に多くあることで、さまざまな課題を抱えた人をネットワークで支えることが可能となる。演者は地域医療に従事する医師という立場から、映画づくりや死生観に関する対話活動によって、地域のウェルビーイングに資する活動を実践してきた。本講演ではそれらの実践を振り返りながら、コミュニティのウェルビーイングについて考察を深めてみたい。

## 伊藤智樹さん：

富山大学学術研究部人文科学系（人文学部）教授。専門は社会学。アルコール依存、死別体験、吃音などのセルフヘルプ・グループに参加してその場で病いを語ることがその人に何をもちたらずのかを研究。現在は、難病と高次脳機能障害を主要なフィールドとして、当事者同士の支え合い（ピア・サポート）がどのようにしておこるのかをテーマにした研究を続けている。

【要旨】

現代の社会においては、進歩し続けている医療技術によって、病いをもってより長期的に生きることが可能になる場合が目立つようになってきている。その際、以前とは変わってしまった自分がどう生きるのか、希望を失わずに模索できる機会や場も必要になるだろう。そうした機会や場としてピア・サポートが果たす役割は大きく、一種のコミュニティ的な機能としてとらえることもできるだろう。ただし、大切なことは、そうしたコミュニティの中において、どんな人間同士のやりとりがおこるときに、そうした機会や場だといえるのかを理解することである。

## 桃井里美さん：

強皮症患者会「明日の会」世話人。

2012年に強皮症と診断。2013年ピア・サポートと出会い、2015年に難病ピア・サポート養成研究を受講。2016年に群馬大学医学部附属病院皮膚科の強皮症患者会「明日の会」立ち上げに携わり、ピア・サポーターとして活動を始める。2020年10月より明日の会オンラインサロンを開設。2021年9月よりLINEの強皮症患者オープンチャット共同管理者を務める。

【要旨】 コロナ下では明日の会の活動をオンラインに切り替え、オープンチャットで全国の患者さんとはつながりました。継続的・タイムリーに関われるオープンチャットは「物語」を紡ぎやすいツールです。患者同士が出会うことで「物語」は新しい方向へ。キーワードは「道筋・エンパワーメント・私も」。強皮症専門医との連携で患者参画型医療への貢献を目指しています。

## 松繁卓哉さんの研究テーマ：

保健・医療・福祉の利用者の視点・経験・困難等に関する研究、利用者多専門従事者とのコミュニケーションの問題についても研究。地域で難病患者・家族への支援に従事する人々の育成や、これに関連する研究にも取り組む。難病や障害があっても、自分らしく、住みなれた街で、質の高いサービスを受けながら生活していくことのできる社会の実現に取り組んでいる。